

### III 総括にかえて

## 古式土師器についての若干の所見

－北部九州の外来系甕を中心に－

#### (1) はじめに

近年の古式土師器研究は出土例の増加と共に細分化と形式設定にすぎましいものがあり、特に畿内において著しく進展をみている。北部九州でも最近の調査成果から、僅かな齟齬はあるが、細分化され編年的位置付けが確立しつつある。

昭和54年から調査を継続している塚堂遺跡のA～D地区においても古式土師器の良好な資料が出土しており、筑後川中流域での位置付けがなされると期待しているが、筆者が担当したE地区の6号住居跡からも古式土師器の一括資料が得られた。この土器群は北部九州でも古式に認定できる資料で、庄内式(新)から布留(古)式併行期の過渡的様相を示唆する。これを契機として北部九州(主に福岡県内)の当該時期の状況を概観してみたい。

#### (2) 畿内における形式設定の経過

庄内式土器は田中琢氏の「布留式以前」の論文の中で定義しており、庄内型甕は「細い叩キ技法の採用、底部は平底風の尖り底と丸底、叩キの上からのハケ、内面は頗る丁寧なへう削りで器壁を薄くし、口縁部を「く」字状に外反させ端部を上方に摘み上げ、輪つみの痕跡を残す」等の特徴を挙げ、壺は「装飾性の豊かな複合口縁、やや長い口頸部と丸い体部に尖り底を持つ暗褐色のもの、外面をへう磨きした厚手の赤褐色の色調を持つ」等の特色を指摘している(註1)。

安達厚三・木下正史氏は飛鳥地域で庄内式から布留式期にかけての好資料を得て位置付けを試みている(註2)。それに依ると藤原宮内裏東外郭地域出土の土器群を庄内式として提示し、「甕A(平底)と甕B(尖り底)とが伴出し、無秩序に混在することから両者は分離し難い」とする。布留式については坂田寺下層から上ノ井手井戸上層までの変遷過程の中で編年的位置付けを試み、甕Aの特徴は外反する口縁部に端部が内側に丸く肥厚し、上ノ井手SE030上層の甕に致っては口縁部が内弯し端部が内傾すると共に体部は長くなる。甕Bも長胴化の傾向を示し、小型精製土器三種(小型丸底・鉢・器台)は消失する時期の一群で、須恵器出現

前の土器群とする。

石野博信・関川尚功氏は昭和51年に莫大な土器群を出土した纏向遺跡で庄内式を2形式に細分し(註3)、纏向2式(庄内1式)では口縁部に装飾を施す複合口縁壺が主体で、甕は穂積型(甕A)と庄内型(甕B)が同数の比率で出土し、3式(庄内2式)では叩き成形の甕Bとハケを多用する甕Cが共伴する。甕Cは2式に出現し3式に盛行する器形であるという。さらに、庄内型甕を河内型(口縁の外反度は鋭く端部を摘み上げ、右上りの細目の叩きとハケ調整、底部は尖り、茶褐色)と大和型(口縁は外方に直線的に伸び、端部は摘み上げ状に肥厚させ、叩きの幅が太く左上りか水平)に区別する。甕Cは尖り底から丸底へ移行し、口唇部は内傾するものも現われ、口縁部は内弯傾向の甕が少量あるとも指摘している。体部全面には不定方向のハケが基調で肩部に横ハケの採用が出現し、刺突文も現われるらしい。

へう削りは瀬戸内地域に先行する技法で、刺突文も上東遺跡のオの町Ⅱ式に先出しており、両者は時期差こそあれ、吉備地方を中心に東西に伝播した技法であろう。

甕Cに対して木下氏は、畿内各地で検出されることから時期差として捉える必要性を強調する(註4)。確かに甕Cは甕Bに対して新しい調整手法が導入され、盛行期が甕Bに比べ遅れることから時期差と考えた方が妥当とも受けとられる。

井上和人は、田中琢氏の「型の手法」の土器製作技法(註5)を援用し乍ら、庄内(新)から布留終末期の土器製作は「下半部外型作り成形技法」を採用するという興味深い見解を示した(註6)。氏は庄内(古)期の甕は畿内第5様式の系譜を引く「平底作り段階的成形技法」で、庄内(新)期からは「下半部外型作り成形技法」で土器が製作され、その時に指圧痕を残すとする。確かに布留併行期の甕の底部内面を詳細に観察すると指圧痕が残り、その部分はへう削りを用いることなく薄い器壁をなす例が多々ある。しかもこの技法はオの町Ⅱ式にも採用されていることから、へう削り・刺突文と同様瀬戸内地方からの波及であると推測している。

では北部九州の実状はどうであろうか。上記の諸見解を援用し乍ら数少ない資料ではあるが検討してみたいが、纏向で甕Cとした中には口縁部が内弯するより新しい形態の甕があり、九州の実例では口縁の内弯傾向を持たず、不定方向のハケを施すものを纏向での甕Cとして扱う。

### (3) 北部九州における甕形土器の抽出とその特徴

北部九州における当該期の資料は僅少乍ら、近年では井上裕弘、柳田康雄、折尾学・常松幹雄の諸氏が編年的位置付けを試みている(註7)。

庄内型甕の出土例をみると、春日市の柏田遺跡、津屋崎町の今川遺跡、前原町の三雲遺跡、那珂川町の今光遺跡、福岡市今宿の高田遺跡、同西区の原深町遺跡、同西新町遺跡、志摩町の御床松原遺跡、甘木市の上々浦遺跡等があり、以下諸遺跡の土器を概観する。

**柏田遺跡**では庄内型の甕は1号・2号長方形土壇と旧河川から、甕Cは7号住と旧河川から出土している。庄内型の甕は単独時期の一括土器で、口唇部を摘み上げ状に肥厚させ、体部は左上りの叩き調整がなされ(1個体は右上り)、石野氏によれば庄内型大和甕との指摘がある(註8)。甕Cは布留(古)式の甕と共伴し、口唇部は外側に肥厚させる。横ハケのみられるものである。

**今川遺跡**の庄内型甕は包含層の中層から出土し、甕Cと布留(古)式と共伴している。庄内甕は口唇部を僅かに摘み上げ、底部は尖り底である。体部外面には右上りの細目の叩きで仕上げ、色調は外面に煤が付着し黒褐色をなすが、煤の剥げた箇所は暗茶褐色の色調を持つ。以上の特徴から報告者の記述どおり河内型甕である。甕Cは頸部下からへうで削り、外面はハケで調整されるが不定状の横ハケがみられる。灰白色の色調を持つ。他に山陰系の甕で布留(古)式に比定できる搬入品があり、壺は山陰Ⅳ式に併行関係が求められ、布留(古)式よりは先行するとされている(註9)。壺には庄内甕と併行関係のものもある。いずれにしても包含層中層の土器群は庄内式～布留(古)式の時期幅の少ない堆積層である。

**三雲遺跡**ではサキノ1号住居の土器群中に庄内型甕と甕Cの他、山陰系の土器が搬入されている。庄内型甕は実見したが、口唇部は摘み上げ状に肥厚させ、内面のへう削りは頸部より一段下部から削っており、底部は小さな平底を残している。体部は左上りの叩きで、暗灰褐色に近い。叩きは今川出土の甕のそれとは明らかな相違を示し、太目でしかも左上り、色調も灰色系統をなすことから庄内大和甕といえる。甕Cは口唇部を摘み上げ、球形の胴部に丸底をなす。体部外面は不定方向のハケ調整が施される。頸部下2cmからへうで削る。底部内面には指圧痕が残り、井上(和)氏の指摘する「型作り技法」の痕跡か。他に内弯傾向の甕も共伴し、住居から出土した土器の時期に若干の幅があり布留(古)式が搬入された時期とされよう。

**今光遺跡**の庄内型甕は大溝(旧河川)からの出土で共伴土器に時期差がある。口唇部を僅かに摘み上げ、底部は小さな平底を残す。体部外面は左上りの細目の叩き調整で、叩きの幅は三雲例より今川例に近い。灰褐色の色調を持つ。叩きの方向は左上りであるが細目であり疑問を残すが、折衷型とも受けとられる。他に口縁部に装飾を施した複合口縁壺がある。7号住居からは右上りの細目叩きを持つ甕があるが、器壁は厚く内面上半に横ハケ調整を残し、調整・技法上に問題がある。

**今宿高田遺跡**では26号住居から胴部の破片が出土している。外面は三雲に近い太筋の叩きで調整され、左上りか水平である。色調は淡い褐色でやや灰色っぽく大和型甕に近い要素を持つ。この甕にはハケを多用する甕Cは伴っていない。

**原深町遺跡**では大溝Ⅵ区から破片が出土している。土器説明がないため詳細な点は明らかでないが、図示された範囲内では口縁の特徴、左上りの叩き等から柏田出土例に酷似している。他にⅤ区から甕C、山陰系の刺突文を有す壺、布留(古)式の甕等が出土しているが、出土土器に時期幅があり一括資料とはなり得ない。

西新町遺跡では多量の古式土師器を出土しており、良好な一括資料が多い。庄内系統の甕はD地区8号住居とF地区1号住居から出土している。前者は多くの共伴土器があるが、庄内系甕は1点のみで直線的に外反する口縁と口唇部の摘み上げ、細い叩き等の特徴は一応の技法を保持し乍らも、内面はハケとヘラ削りを併用し今光7号住居出土例に似る。叩きは図面で観る限り水平であり、大和型甕に近い。共伴する壺・鉢は併行関係に位置付けられる。甕Cは3点ある。口縁は直線的で口唇部を内外に肥厚させ、体部のハケはやや乱れるが横ハケがみられ、肩に一条の沈線を廻らす。この内の1個体には一部に左上りの叩きを残している。他の甕は口縁が内弯し、肩部に3～4条の沈線を廻らすもの、明瞭な横ハケを施し、定形化した器台の出現等から布留(古)式併行期の器種も新たに搬入された過渡の様相を看取できる。F地区1号住居出土の庄内型甕は形状が前者の甕と酷似し、内面は頸部下よりヘラ削り、頸部は鋭い稜をなし、外面は左上りの叩きで下部はハケでナデ消す。大和型甕か。共伴の甕は内弯する口縁の布留(古)式併行の土器である。

御床松原遺跡では38号住居の一括土器群の中に庄内型甕が1点ある。口縁部は直線的のび口唇部は摘み上げ状に肥厚させ、内面は頸部の一段下からヘラで削る。体部外面は左上りの太目の叩きで底部は尖り底である。淡い灰褐色をなし、大和型甕である。共伴する甕の口縁は僅かに内弯し、肩には刺突文を配し、布留式に特徴的な横ハケ調整でヘラ削りは庄内型甕と同様である。

上々浦遺跡では溝8上層から1点出土している。共伴する甕は甕C1点と布留(古)式に相当する。庄内型の甕の口唇部は摘み上げ、口縁部は直線的で体部には右上りの叩き成形が残る。頸部はヘラ削りにより鋭い稜をなす。甕Cは(169)がある。口縁は直線的で外面に不定方向のハケで調整する。他に甕Cに準ずる土器は溝9にあり、肩部に横ハケと沈線が出現している。ヘラ削りは頸部直下と僅かに下段からとがある。共伴する土器に庄内併行期の壺と口縁の内弯する布留(古)式の甕がある。

#### (4) 外来系甕形土器の評価

纏向の2式では細かい叩き成形の土器に併行して甕Cが出現し、纏向3式で盛行するとされたが、庄内型甕と甕Cの盛行期に時期差があることから、木下氏の指摘するように甕Cの調整手法は叩きを消す技法と見做され、明らかに新しい手法で甕Bとされる庄内型甕と甕Cは時期差から生じた差として認識できる。

北部九州における調整手法の先後関係では、細かい叩き(左・右上り)→不定方向の細いハケ(叩きを消す新手法)と肩部に1条の沈線の出現→外面頸部下の縦ハケのハデ消しと定

形化した横ハケ及び肩部の1～4条の直線並びに波状沈線の定着等の過程を経て、成形技法では頸部直下からのへう削り→頸部直下と一段下部のへう削り混在→一段下部からの削りと移行し、器壁を薄くする目的での指圧痕は北部九州の例でみると、畿内よりやや遅れて甕Cの段階に導入されたと考えられる。同時期の在地系の甕にもその痕跡を留めた例があるが、本来の目的である器壁を薄く仕上げるまでには至っておらず、技法的に拙劣なのか成作技法の違いなのか今の段階では明らかでない。

共伴関係でみると柏田遺跡では庄内型大和甕(?)が単時期で出土し旧河川から同型甕と甕Cとが共存し、今川・三雲・西新町の諸遺跡では庄内型(河内・大和型)甕・甕C・布留(古)式、御床松原・上々浦遺跡(溝8)では庄内型甕・布留(古)式、上々浦溝9は甕C・布留(古)式、塚堂遺跡ではA地区14号住居から甕Cを主体とする土器群が、B地区大溝支流1から甕C・布留(古)式、C地区1号住居から甕C・布留(古)式、E地区6号住居から甕C・布留(古)式が各々伴出する。

纏向遺跡では庄内型甕と甕Cとが共存するが、盛行期に新旧のずれがあり、甕Cとされる中には布留的な傾向の強い土器の混入もあるとの指적이なされ(註10)、大溝出土で層位的な混入も考えられなくないが、甕C自体の時期幅を狭く考え、纏向3式にはすでに新しい手法・技法を有する布留式土器の出現がみられたのではなかろうか。

北部九州の共存関係での出土例をみると玄界灘に近い海浜部で甕Cは庄内型甕と布留(古)式甕と共伴し、内陸部では甕Cと布留(古)式が共存する例が多く、総体的に布留(古)式との共存が強いといえる。E地区の6号住居の土器群では庄内的傾向の強い壺・鉢・高杯が多く、23を除く甕では定形化した横ハケと縦ハケを多用し、形態的にも甕C(23)よりは後出する特徴を示していることから若干の時期差を認めなくてはならない(註11)。器種構成の中で壺・鉢・高杯等は日常頻繁に使用され消耗される器種ではなく、甕形土器にその器種をみ、新しい技法・調整手法は甕に現われると考えるので、他の器種は新しい要素を持つ甕に共存関係を求めることが考慮される。海浜部及び内陸部の共伴関係にも上記の現象が現れることから甕Cの定着時期の幅が狭いことが判るのである。塚堂E地区6号住居の出土土器群はこの過渡期的様相を如実に物語る資料であろう。

当該住居跡に時期的に近似する資料として甘木市の大願寺方形周溝墓があるが、甕Cに併行関係にある土器は外来系の複合口縁壺のみで、甕はE地区6号住居の布留(古)式と変化は少なく、広口壺は6号住居の同系譜の壺よりも新しい要素を持ち布留(古)式の範疇のものと考えた方が妥当であろう。

北部九州出土の庄内型甕には井上(和)氏の指摘する指圧痕が現われておらず、底部の小さな平底の甕と尖り底・丸底の甕とは製作技法が異なることから庄内式でも古相の部類に入れられるが、今川・三雲・柏田の庄内型甕よりも先出する甕が那珂川町の松の木遺跡138～140街区8

号住居(註12)と150街区22号・27号・35号・38号(註13)から出土し、纏向1式とされる畿内第5様式系統の叩キを持ち、外面下半をハケで仕上げ、内面はへう削りとハケが混在し、小さな平底をなす一括土器群があり、沢田康夫氏から教示を受けたが在地系の土器と共伴するが庄内型甕は共存しておらず、150街区の住居からも出土していない。

北部九州において最古式の土師器を設定する場合、松の木の出土例をそれに当て、三雲・柏田・今川の庄内型甕に共伴する土器群を前者に後出する資料とし、三雲・西新町・今川・塚堂遺跡の甕Cを庄内式(新)相とすることができ、塚堂E6号住の定形化した横ハケの出現を持って布留(古)式に比定できると考える。

また、北部九州に搬入された庄内型甕は大和型甕が比較的に多く、大分県安国寺出土の甕も大和型とされており(註14)、片寄った一地域の甕の搬入に何等かの意義を持たせる必要があるが、時間的余裕がないため省略する。

## 参考文献

1. 井上裕弘・小池史哲編「山陽新幹線関係埋蔵文化調査報告」(第4集下巻)－1977－福岡県教育委員会
2. 酒井仁夫・伊崎俊秋編「今川遺跡」(津屋崎町文化財調査報告書第4集)－1981－津屋崎町教育委員会
3. 柳田康雄・小池史哲編「三雲遺跡Ⅲ」(福岡県文化財調査報告書第63集)－1982－福岡県教育委員会
4. 佐々木隆彦編「今光・地余遺跡」－1980－東急不動産株式会社
5. 佐々木隆彦編「今宿高田遺跡」(今宿バイパス関係埋蔵文化財調査報告書第10集)－1984－福岡県教育委員会
6. 飛高憲雄・力武卓治編「原深町遺跡」(福岡市埋蔵文化財調査報告書第71集)－1981－福岡市教育委員会
7. 折尾 学・常松幹雄ほか「西新町遺跡」(福岡市埋蔵文化財調査報告書第79集)－1982－福岡市教育委員会
8. 井上裕弘編「御床松原遺跡」(志摩町文化財調査報告書第3集)－1983－志摩町教育委員会
9. 佐々木隆彦編「九州横断自動車道関係埋蔵文化財調査報告」(1)－1982－福岡県教育委員会
10. 柳瀬昭彦編「川入・上東」(岡山県埋蔵文化財発掘調査報告16)－1977－岡山県文化財保護協会

## 註

- 註1 田中琢「布留式以前」(考古学研究第12巻第2号)－1964－  
註2 安達厚三・木下正史「飛鳥地域出土の古式土師器」(考古学雑誌第60巻第2号)－昭和49年－  
註3 石野博信・関川尚功「纏向」(橿原考古学研究所編)－1976－  
註4 木下正史「書評－奈良県『纏向』」(考古学雑誌第64巻第1号)－1987－  
註5 田中琢「畿内と東国－古代土器生産の観点から－」(日本史研究90号)－1967－  
註6 井上和人「『布留式』土器の再検討」(文化財論叢)奈良国立文化財研究所創立30周年記念論文集－1983－(井上氏の云う「下半部外型作り成形技法」の視点から御床松原出土の庄内型甕を実見したが底部付近まで、粘土帯の接合部と思われる割れが認められたことを付言しておく。)  
註7 井上裕弘「弥生終末～古墳前期の土器群について」(山陽新幹線関係埋蔵文化財調査報告7下巻)－1978－福岡県教育委員会

柳田康雄「三・四世紀の土器と鏡－『伊都』の土器からみた北部九州－」(森貞次郎博士古稀

記念古文化論集)－1982－

折尾学・常松幹雄「北部九州における西新町遺跡の位置－土器の形式分類と編年を中心として－」(福岡市埋蔵文化財調査報告書第79集)－1982－福岡市教育委員会

註8 石野博信「奈良県纏向石塚古墳と纏向式土器の評価－木下正史氏の批判に答える」  
(考古学雑誌第64第4号)－1979－

調査を担当された井上裕弘氏から柏田遺跡出土の庄内型甕は、河内型でも大和型甕でもなく、他地域からの搬入品との指摘を受けた。

註9 藤田憲司「山陰『鍵尾式』の再検討とその併行関係」(考古学雑誌第64巻第4号)－1979－

註10 前掲註4

註11 6号住居跡出土の25の甕は形態的に甕Cに近い。

註12 那珂川町の沢田康夫氏から教示を受けた。

註13 1984年に報告書刊行予定

註14 前掲註3

乙益重隆「安国寺遺跡出土の土器」(土師式土器集成本編1)－1971－